



放射線リスクコミュニケーション

相談員支援センターだより



複数市町村意見交換会

第9回相談員合同ワークショップ

令和7年9月17日、大熊町の産業交流施設「CREVAおおくま」において、福島第一原子力発電所事故の発生当時、避難指示等が出された12市町村^{*1}及び中核市の放射線相談員、生活支援相談員、自治体職員、移住定住支援センター職員等を対象とした「第9回相談員合同ワークショップ」を開催しました。午前は講演と情報提供、午後はグループディスカッションの2部構成で行われました。



講演の様子

午前の部では、はじめに大阪大学大学院人間科学研究科准教授の平井啓先生から「放射線に関する知識および健康不安に応じたコミュニケーションの手引き」と題して講演いただきました。より効果的なリスクコミュニケーションの実践を見据え、放射線の健康影響や不安に関連した情報の伝え方、それに伴う受け手側の心理の理解についてお話をありました。行動経済学に基づいて、実証データや実例をふんだんに含めた理論的な説明があり、参加者も熱心に耳を傾けていました。

つづいて内閣府原子力被災者生活支援チームより避難指示解除に向けた取組の現状について、また、環境省福島地方環境事務所より福島における環境再生事業について、それぞれ最新の情報提供が行われました。

午後の部では、参加者は3グループに分かれたうえ、それぞれ前・福島市立松陵中学校校長の阿部洋己先生、福島大学教育推進機構特任助教の久保田彩乃先生、(公財)原子力安全研究協会技術顧問の松原昌平先生をファシリテーターに迎え、グループディスカッションを行いました。



グループディスカッション等の様子

放射線に関する情報等の説明方法、ひいては広く住民等とのコミュニケーションの全般において、参加者間で今までの経験事例や失敗について、またそれに対する解決策や意見が積極的に交わされました。

グループごとに「情報を一方的に伝えるのではなく、なぜ情報が欲しいのか、背景を知ることで解決につながることもある。」「分かりやすい解説や発信等、理解が深まるような工夫が重要である。」「安全や問題ないという言葉だけではなく、飾らずにありのままを伝えることで、受け入れてもらえる。12市町村で連携し、地域の新たな魅力を再発信できると良い。」等の意見があつたと発表がありました。参加者からは対象者との意思疎通の在り方を常に模索している様子がうかがわれ、ツールとしてスマートフォンアプリの活用が有効であった等の実際に即した意見もあり、より円滑なコミュニケーションを目指した意見を共有する様子が見受けられました。

最後に、ジャーナリスト・環境カウンセラーである崎田裕子先生から「情報を知りたい方に、きちんと欲しい情報が届いているのかを話し合うことが大事である。」「相談を受ける側の心のケアが大事である。今回のワークショップのように、同様の立場の方々が集

まるができる場を利用し、お互いの経験を共有しながら、それぞれの地域の活力につなげて欲しい。」等の講評がありました。今回のワークショップはそれぞれの状況で抱える放射線についての情報発信やコミュニケーション全般にわたる経験や克服すべき問題を、年代や地域、立場を超えて共有する貴重な機会となりました。参加者からも課題解決の場として今後も継続して開催して欲しいとの声が多く聞かれました。

※1 広野町、檜葉町、富岡町、川内村、大熊町、双葉町、浪江町、葛尾村、飯館村、南相馬市、田村市、川俣町

住民セミナーの例 夏休み親子教室を開催しました (いわき市)

令和7年7月27日(日)に、いわき市総合保健福祉センターにて、いわき市内の小学生と保護者を対象とした夏休み親子教室「みんなで学ぼう！放射線」を開催しました。このイベントには事前に申し込んだ11組の親子が参加し、親子で放射線について楽しく学ぶ有意義な時間となりました。

松原昌平先生((公財)原子力安全研究協会)を講師に迎え、小学生にも分かりやすい言葉と親しみやすい雰囲気でお話をいただきました。先生は、県内外の自治体や学校などで数多くの講義や相談対応を行っており、豊富な知識と経験に基づいた説明に、参加者の皆さんも真剣な表情で耳を傾けていました。



講義の様子

今回の親子教室は、放射線に関する基本的な知識のお話のほかに、実際に測定器を用いた実習や、霧箱の観察、○×クイズ等も行いました。はじめに全員で「放射線のおはなし」として、放射線は身近にあること、量が多すぎると危ないこと、目には見えないが測ることができること等の話を聞きました。その後は「みん

なで実験しよう」として、低学年と高学年に分かれてGMサーベイメータを利用した測定実習を行いました。

低学年では、身の回りのもの（肥料や塩、ポテトチップスなど）を用いて、各々がどれだけの放射線量を出しているのかを実際に測ってみました。身の回りにあるものからも放射線が出ていることを知り、驚いている様子が見受けられました。

また、高学年は遮へいキットを使って、外部被ばくの低減三原則「時間、距離、遮へい」について学習しました。マントルから出る放射線量が、距離や時間、遮へいするものによってどれだけ変わるかを記録シートに記入しながら実習を行いました。

その後は、「霧箱観察」、「遮へいクイズ」、「測定器の展示」の3ブースを用意し、参加者はブースに分かれて観察や測定を行いました。

「霧箱観察」のブースでは、霧箱の中に現れた放射線の飛跡を観察することができ、多くの子供たちが興味深く眺めていました。「白い雲のような線が見えた！」、「放射線は目に見えないけど、放射線の通った跡は見えるんだね。」と、驚きの声があちこちから上がっていました。

「遮へいクイズ」のブースでは、マントルとGMサーベイメータの間に挟むものを変えて、遮へいの力が一番強いものはどれかを当てるクイズを行いました。ノートや段ボールでも放射線を遮ることができること、水やアルミ板が遮へいする力が強いことを学びました。

「測定器の展示」ブースでは、GMサーベイメータ、NaIシンチレーションサーベイメータ、環境放射線モニタRadi、個人線量計のDシャトルを展示し、実際に触ってもらう体験を行いました。普段あまり目にしたことのない測定器の数々に、参加者たちは興味津々な様子で触っていました。



測定実習の様子

後半には、学んだ内容を活かし○×クイズに挑戦しました。親子で頭を悩ませながら取り組む姿が印象的で、会場には終始和やかな笑い声と歓声が広がっていました。

今回の教室を通じて、普段は意識しない放射線の存在を、より身近に感じる機会となり、「放射線=こわいもの」といった一面的なイメージだけでなく、「正しく知ることの大切さ」、「科学的に考える姿勢の重要性」が伝わったのではないかと感じています。参加された保護者の方からは、「放射線について親子で学習でき、良い機会を設けてもらい感謝している。」「放射線が思っていたよりも身近なもので、第一原発事故の前から存在していたことに驚いた。」といった声が寄せられました。

また、今回の親子教室に参加したお子様が内容に関心を持ち、理科の自由研究として取り組み、福島県小学校児童理科作品展いわき地区展に出展されました。イベントが子供たちの学びや探究心を育むきっかけとなつたことを嬉しく思います。今後も、放射線リスクコミュニケーションセンターでは、様々な学びの場を提供してまいります。

研修会の例

福島市教育委員会

福島市教育委員会では、市内の教員を対象に防災・放射線教育研修会を行っています。その一環で、実地研修として、第一原発の見学を通じ、放射線に関する理解を深めています。

研修会に参加することで、福島の現状や放射線についての理解を深め、震災後に生まれた児童・生徒へ向けての放射線教育や復興について指導する教育現場や業務に活かすことを目的として、令和7年7月1日、第一原発視察、ならびに視察の理解をより深めるための講義を実施しました。

講師には、放射線管理の経験があり、放射線取扱主任者講習においても講師を務めたことがある峯村明彦



廃炉資料館での様子

先生((公財)原子力安全研究協会)を迎える、日頃から児童・生徒を指導する側にある今回の参加者が、専門的な知識を得ることにより、放射線教育に活かせるような研修となり、より学びを深めるものになりました。講義は「放射線の基礎」でしたが、参加者はもともと同テーマをある程度学んでいる方も多く、講師への質問が随所で出るなど、充実した研修となりました。

視察後の質問では、「ALPS処理水が放出^{※2}されると海水によって希釈されるとのことだが、放出前の放出口近辺の濃度はどれくらいあるのか」等が出るなど、ふだん見聞きする情報より一步踏み込んだ内容について、東京電力担当者や専門家からの回答を得ることで、現状を把握し、疑問解消につながったシーンが見受けられました。

参加者からの声として「第一原発の見学ができたことは大変有意義であった。実際に見る、感じる、話を聞くことは、単にVTRや講義で聴くのとは違い、得るもののが多かった。放射線の知識については、先生方も基本を十分に理解しているため、今後の廃炉や処理水、復興に向けてどのように子供たちと考えていくことが大切なのかと感じた。」「現在、廃炉に向けて着実に進んでいることが分かった。迅速に完了し、現在残っている放射性物質が適切に処理されると良いと思う。」等があがりました。



第一原発構内の様子

また、車窓から富岡町の田畠を見た参加者から「農作物は自由に作っていいのか。出荷できるのか。」等との疑問が投げかけられ、地域の作物作付け等、事故後14年が経過した現在の町の生活についても考える機会になりました。こうした地域の抱える問題のひとつを考えることは、現地視察を通して気づくことも多く、その意味でも今回の視察が有意義なものになつたと感じています。

※2 福島第一原発の廃炉を進めるために、国際基準以下の濃度に管理された上でALPS処理水が放出されている

放射線教育の例 福島県立安達高等学校

安達高校は、国連教育科学文化機関（ユネスコ）から「ユネスコスクール」として加盟承認されており、ユネスコ憲章に示されたユネスコの理念を実現するため、平和や国際的な連携を実践しています。

その一環として復興教育に取り組んでおり、第一原発視察を柱として、震災からの復興や未来の在り方について考える放射線教育を実施しています。

令和7年7月24日、第一原発視察をより有意義なものにするために、専門家による事前学習を実施しました。講師に、（公財）原子力安全研究協会の杉山和幸先生を迎えて、講義では「放射線の基礎」、実習では放射線測定機器を使用した測定実習を実施し、放射線への理解を深めました。



講義の様子

教室には施設視察を志願した生徒24名が集まり、通常の授業では聞くことのできない講義内容に真剣に聞き入り、測定実習では、日常生活で目にする機会がない放射線測定器に実際に触れながら、身近なものの放射線量を計測する等、新しい知識を身に付ける機会となりました。

講義・測定実習を終えた生徒からは、「カリウムは怖いものであるのか」と質問があり、講師から「怖くない。体内からも4,000Bq程度は検出される。」との回答を得て安心したひとこまがありました。また、「実際にマントルや身の回りにある物の放射線量を測ることができて、とても分かりやすかった。」「話を聞くだけではなく、実際に自分たちで測ることで食品の安全性

などを知ることができた。」と実習の面白さを感じたようです。



実習の様子

また、「少しの知識しか持っていないかったため、第一原発視察前に基本的なことを教えてもらい大変良かった。」、「(第一原発視察では)実際に目で見ることで、インターネットでは分からぬような、視察に行くことで分かる復興の現状をしっかりと学びたい。」との声から、講義・実習で得た体験は学びが深く、視察へ向けての意識が高まったことが伺えました。

事前学習を経て、8月1日に催行した第一原発視察では「ふだんは立入り禁止であるところに行かせてもらったり、現地に行かないと見ることや知ることのできないものを見学できたり、多くの貴重な経験ができる大変うれしかった。放射線関連の知識を全く知らなかつたが、本日の経験により多くの知識を得ることができた。このことを機に、これからのこと役立てていきたいと思う。」等との感想が出され、講義で得た知識を土台に、様々な角度から現場を見学できたことで、復興教育の一助になった印象を持ちました。どの生徒も、講義・実習並びに現地視察を通じて、放射線についてこれまで以上に向き合い、復興の現状をより深く学び、今後を考える機会になりました。

放射線リスクコミュニケーション

相談員支援センターだより No.47

発行：放射線リスクコミュニケーション相談員支援センター

連絡先：〒970-8026 いわき市平字小太郎町1-6

いわきセンタービル5階

フリーダイヤル：0120-478-100

FAX：0246-35-5158

E-mail：F-sodan@nsra.or.jp

